

学校段階別の勤労観・職業観の特徴
——「みやぎ仕事作文コンクール」受賞作文を対象とした
計量テキスト分析から——

渡辺 伸子

東北公益文科大学総合研究論集第37号 抜刷

2020年1月20日発行

研究論文

学校段階別の勤労観・職業観の特徴 ——「みやぎ仕事作文コンクール」受賞作文を対象とした 計量テキスト分析から——

渡辺 伸子

Characteristics of school stages in work and occupational attitudes:
Quantitative text analysis of “Miyagi essay contest about work” data

Nobuko WATANABE

summary

Attitude regarding work and different occupations in students were investigated. The data of the “Miyagi essay contest about work” were analyzed by using the quantitative text analytical method. Result indicated that (1) elementary school students form their attitudes regarding work and different occupations through their parents; (2) junior high school students form their attitude regarding work and different occupations based on work experience programs, but they believe that they form them on their own; (3) high school students form their attitudes regarding work and different occupations through their school life experiences. These results indicated that older students form attitudes regarding work and different occupations by themselves. Finally, four limitations of this study are discussed.

Key words: Attitude to work and occupation, Quantitative Text Analytical Method, school stage

問題と目的

中央教育審議会（1999）の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」において、キャリア教育を小学校から発達段階に応じて実施するという方針が示された。キャリア教育とは、「端的には、“児童生徒一人一人の

勤労観，職業観を育てる教育”』との定義が採用されている（文部科学省，2006）。

キャリア教育の全体計画の作成率は，小学校で63.4%，中学校で81.3%，高校で70.4%，年間指導計画の作成率は小学校で46.7%，中学校で76.7%，高校で80.4%となっている（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター，2013）。いずれも小学校では計画作成率が低いが，中学校と高校では7割を超えており，中学校と高校では計画的なキャリア教育が広く実施されている状況にある。

キャリア教育の中でも特に体験的な学習形態は，中学校における職場体験と高校におけるインターンシップであると考えられる。公立中学校における2017年度の職場体験の実施率は98.6%であり，ほぼすべての公立中学校で職場体験が実施されている。実施している主たる学年は8割以上が2年生となっていた（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導センター，2019）。体験の実施期間は1日～3日で9割を占めていた。つまり，公立中学校では，ほぼ全ての学校で職場体験が行われており，第2学年で1～3日の期間が確保されている状況とってよい。また，公立高校における同年度のインターンシップの実施率は84.8%であり，在学中に1回でもインターンシップを体験した生徒の割合は34.9%である。公立中学校の職場体験と比較してやや実施率が低くなるものの，多くの公立高校でインターンシップが実施されている状況にある。このように，中高生にはキャリア教育の一環として，実際の職業を体験し，職業や仕事について考える機会が与えられるようになってきている。

しかしながら，そのようなキャリア教育が実際に児童生徒の勤労観，職業観にどのような影響を与えているのかについて十分に明らかにされているとはいえない。そこで本研究では，児童生徒の仕事についての作文を分析することで，児童生徒の勤労観，職業観の様相を明らかにすることを目的とする。

児童生徒の勤労観や職業観を作文の分析から明らかにしようとする試みは，これまで多少少ないながら行われてきた。たとえば，高橋・阿比留・深作（2010）は，東京都新宿区で2008年に行われた「しんじゅく・わたしの街 働く人・地域の仕事・家族」という作文コンクールに応募された1768点を対象に分析を行っている。コンクールの対象は，小学3年生から6年生までであった。分析

の結果、全学年を通して家族を書く傾向が見られたこと、同性の親について書く傾向があったことが見出された。また、そのようになった理由として、作文執筆にあたり、児童が家族にインタビューを行うなど、家族とコミュニケーションが行われたためではないかと考察されている。

中学生を対象とした研究もある。中学3年生77人の書いた職場体験学習についての作文を分類・整理した木崎・山口（2003）では、作文の記述内容は大きく次の3点に分けられるとした。すなわち、(1)体験先職場についての事前情報、(2)体験先職場でのエピソード、(3)職場体験を終えての評価と感想、である。それぞれについて、(1)は8の、(2)は14の、(3)は11の下位分類が見出された。また、それぞれに、心情や気持ちについての下位分類があった。

高校生を対象とした研究としては、園芸関係の学科で学ぶ高校生のインターンシップの報告書に対してテキストマイニングを実施した水島（2018）がある。分析の結果、インターンシップは生徒の職業観の育成や学習意欲の向上などに効果を持つと結論づけられている。

大学生を対象としたものでは、教職志望学生の振り返りワークシートに対し計量テキスト分析を実施した院田・舟生（2018）や、キャリアデザインの授業を履修した学生のレポートを同様の方法で分析した松本（2015）などがあり、インターンシップやキャリア教育の効果を、レポートを用いて検証する試みが徐々に行われるようになってきている。

ところで、労働の対価として賃金が発生することが法に定められている。しかしながら、職場体験やインターンシップは教育活動の一環として行われる関係上、参加によって中高生が賃金を手にすることはほとんどないと考えられる。しかしながら、前述の通り、実際の労働者の行う労働では賃金が発生しており、賃金の発生しない職場体験やインターンシップはある意味で不十分な体験活動となっている。そのため、賃金が発生しないという不十分な体験が児童生徒にどのように受け止められているのかについても本研究では探索的に検討する。渡辺（2014）は、大学生を対象としてお金に対する考え方を尋ね、アルバイトの経験状態によって差があるか検討している。分析の結果、大学生用お金に対する信念尺度の5下位尺度のうち、2下位尺度でアルバイトの経験状態による差が見られた。これはアルバイトという、労働によって賃金を手に入れる経験

が大学生のお金に対する考え方に影響を与える可能性を示すものである。しかし、中学生の職場体験や高校生のインターンシップでは賃金が得られない。そのため、本研究では、賃金が得られないことで職業や仕事についてどのような考えが形成されるのか探索的に検討する。

本研究では、2014年と2015年に実施された「みやぎ仕事作文コンクール」の受賞作品を分析対象とする。同コンクールは宮城県内の小学生、中学生、高校生を対象としており、学校段階による差を明らかにするために適当であると考えられるためである。一方で、コンクールの受賞作品を対象とするため、児童生徒の考えがそのまま反映されているわけではない。第一に、作文を書く時点での教員や保護者からの指導による影響がある。第二に、選考により選考者である大人が望ましいと思う作品のみが受賞している。以上の2点を勘案すると、本研究で分析対象とする作文は、純粋に子どもの勤労観や職業観を表すものではない。しかしながら、本研究では、学校段階を網羅しているという利点を重視し、同コンクールの受賞作品を分析対象とする。

本研究では、分析手法として、計量テキスト分析を用いる。計量テキスト分析は、テキスト型データを計量的に整理あるいは分析する手法である（樋口，2014）。様々な方法で得られたテキスト型データに適用可能であり、樋口（2014）で例に挙げられている新聞記事の他、これまでにTwitter、雑誌の目次や見出し、アンケートの自由記述、インタビュー記録、会議録等を対象とした研究が行われている（樋口，2017）。本研究では、これまで手作業で分類されてきた児童生徒の作文について、計量テキスト分析を適用することで、使用されている語や語同士の関係を定量的に把握する。

方法

「みやぎ仕事作文コンクール」の概要

「みやぎ仕事作文コンクール」は2014年、2015年の2年間行われた作文コンクールで、宮城県経済商工観光部雇用対策課によって運営された。「このコンクールは、小・中・高校生のみなさんに早い時期から将来の夢や自分のやりたい仕事を考えることの大切さや働くことの“たのしさ”、“難しさ”、また“よろこび”や“やりがい”をお伝えすること、そして県民のみなさんに家庭や学校、

地域が一体となってみなさんの職業意識や勤労観の形成に取り組むことの大切さを広く理解いただくことを目的に実施しました」と実施の趣旨が述べられている（宮城県経済商工観光部雇用対策課，2014：2015）。このことから，作文中には児童生徒の勤労観，職業観が表現されている可能性が高い。応募資格は宮城県内の小学校4年生以上の児童生徒で，特別支援学校の児童生徒も小学部4年生以上が対象となっている。募集テーマは「仕事や職業に関する作文」とされ，「将来の夢・未来のわたし・職場体験から学んだこと・インターンシップを通じて感じたこと・働くことの意義とは・夢の実現のために努力していること」が例として挙げられている。応募学校数と応募作品数を Table 1 に示した。学校数と学校段階別の作品数に増減は見られるものの，2年ともほぼ同数の作品数を得ている。

Table 1 みやぎ仕事作文コンクールの応募状況

年 区分	2014年		2015年	
	応募学校数 (校)	応募作品数 (編)	応募学校数 (校)	応募作品数 (編)
小学校の部	48	650	35	527
中学校の部	30	530	20	624
高等学校の部	9	130	9	203
合計	87	1,310	64	1,354

分析対象作文の数

賞の区分は最優秀賞・特別賞・優秀賞・入選の4つであった。また，特別賞以外の3区分は小学校の部・中学校の部・高等学校の部からそれぞれ選ばれていた。2年とも，21作品ずつが受賞しており，2年合わせて42作品が受賞している。本研究では，この42作品を対象として計量テキスト分析を実施した。計量テキスト分析にはKH Coder（樋口，2014）を使用した。

結果

予備的分析

分析の実施の前に，頻出語や共起ネットワークを確認したところ，「職場」と「体験」の出現数が多く，かつ共起状態にあることが明らかになった。そこ

で、「職場体験」の語を強制抽出するよう設定を行った。

頻出語の分析

42作品を対象として頻出語上位150語を抽出した結果がTable 2である。100以上の出現回数を持つ単語が4語見られた。内訳は、「思う」「人」「仕事」「自分」であった。50以上100未満の出現回数の単語は9語見られた。「夢」「見る」

Table 2 作文で多く使用された語 (頻出語上位150語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	235	父	26	人々	17	担当	13
人	206	勉強	26	病気	17	農業	13
仕事	179	学ぶ	25	不安	17	豊か	13
自分	117	お父さん	24	家族	16	役に立つ	13
夢	80	開発	24	嬉しい	16	話す	13
見る	71	思い	24	支える	16	ありがとう	12
今	65	本	24	七ヶ宿	16	アレルギー	12
言う	61	家	23	体験	16	プリント	12
患者	57	高校	23	大人	16	苦手	12
働く	57	努力	23	入る	16	向かう	12
作る	56	時間	22	良い	16	子供	12
先生	52	整備	22	一つ	15	授業	12
看護	51	前	22	元気	15	職場	12
将来	49	大変	22	向き合う	15	声	12
感じる	48	日本	22	行動	15	大震災	12
心	48	料理	22	使う	15	店	12
考える	47	姿	21	世界	15	懂れる	12
知る	45	水	21	多く	15	入学	12
笑顔	44	相手	21	飛行機	15	訪れる	12
生活	44	必要	21	本当に	15	目標	12
たくさん	40	母	21	友達	15	お客様	11
持つ	39	好き	20	いろいろ	14	学習	11
行く	38	出来る	20	違う	14	楽	11
命	36	変わる	20	覚える	14	就く	11
学校	34	話	20	実習	14	小学校	11
気持ち	34	お客	19	食品	14	製品	11
楽しい	33	介護	19	想像	14	祖母	11
言葉	33	教える	19	体	14	知識	11
建築	32	治療	19	利用	14	方々	11
大切	32	人間	19	一緒	13	訪問	11
生きる	31	多い	19	一生懸命	13		
職場体験	30	目	19	一番	13		
食べる	30	宇宙	18	化学	13		
病院	30	手	18	寄る	13		
分かる	28	大きい	18	技術	13		
聞く	28	大事	18	興味	13		
強い	27	力	18	最後	13		
行こう	27	幸せ	17	子ども	13		
関わる	26	社会	17	初めて	13		
少し	26	職業	17	身	13		

「今」「言う」「患者」「働く」「作る」「先生」「看護」であり、「夢」は募集テーマの「将来の夢」に対応する形で出現回数が多かったと考えられる。なお、出現回数50未満の語にも50以上の語で見られた「患者」「看護」のような医療系の単語が散見された。

頻出語上位150語全体で見ると、「感じる」「好き」「不安」「うれしい」など、気持ちを表す単語が散見された。また、「学ぶ」「学校」「高校」「授業」など、学校生活や学習に関わる単語も散見された。加えて、「父」「お父さん」「母」「祖母」などの家族に関する語も散見された。

共起ネットワークの抽出

語同士の共起関係を明らかにするために、共起ネットワークをFigure 1に示した。分析対象の単位は文とした。Figure 1の通り、8つのサブグラフが検出された。第1のサブグラフには、「知る」「学ぶ」「高校」や「楽しい」「好き」などの学校生活に関わる語と感情に関する語が含まれていた。第2のサブグラフは、「仕事」「思う」「自分」「人」など、頻出語で上位だった語を中心に構成

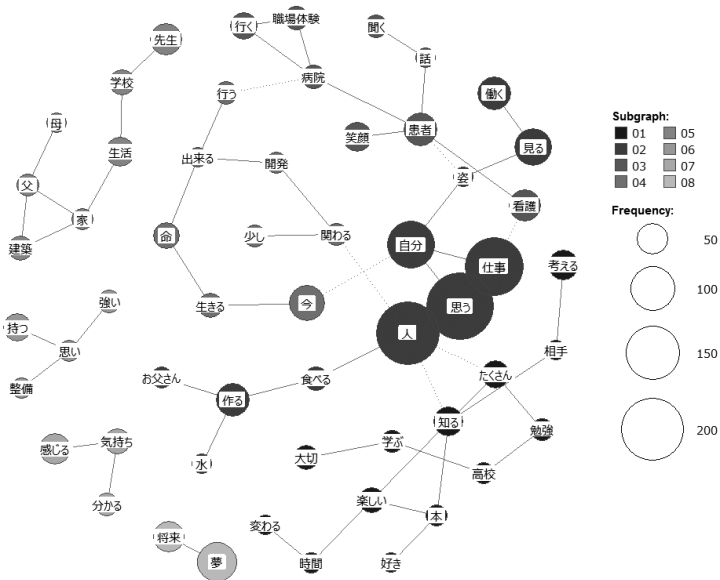


Figure 1 作文で使用された語の共起ネットワーク

されていた。第3のサブグラフでは、「職場体験」「病院」「患者」「看護」など、職場体験に関する語が多く見られた。第4のサブグラフには、「今」「生きる」「命」「出来る」などの、生きていることに関する語が含まれていた。第5のサブグラフでは、「先生」「学校」「生活」「父」「母」など、児童生徒の身近な生活で出会う大人についての語が多く見られた。第6、第7、第8のサブグラフを構成する語はそれぞれ2~4と少なく、また、他のサブグラフとの関連も薄かった。

学校段階別の特徴語

各学校段階の特徴を捉えるために、特徴語を分析した。特徴語分析に際して、特別支援学校高等部の生徒の作文1点を分析対象から除外した。同種の学校に所属する生徒の作文は1点しかなかったため、結果の一般化に支障があると判断したためである。分析対象の単位は作品とした。

小学校、中学校、高校の児童生徒の書いた作文の特徴語を Table 3 に示した。小学生の作文では、「父」が特徴語として抽出されたことが他の学校段階と比較して特徴的であった。他の学校段階では家族に関する語は抽出されなかった。また、小学校では、「生活」という単語も特徴的であった。

Table 3 学校段階別の特徴語（数値は Jaccard の類似性測度）

小学校		中学校		高等学校	
たくさん	.379	職場体験	.929	高校	.769
将来	.313	学習	.533	学ぶ	.526
父	.313	患者	.533	大切	.476
勉強	.304	今回	.500	違う	.467
見る	.303	感じる	.478	入学	.429
作る	.273	病院	.471	考える	.417
生活	.269	話す	.467	持つ	.400
住む	.267	言う	.444	学校	.400
水	.250	体験	.444	様々	.400
豊か	.250	終わる	.429	成長	.357

中学生の作文では、「職場体験」が最も特徴的な語として抽出された。これは募集テーマの例として「職場体験から学んだこと」があったこととも関連するかもしれないが、実際に中学校段階で実施される職場体験が、仕事について考えるきっかけになることを示すものかもしれない。また、おそらく、職場体

験の受け入れ機関となっていたために、「病院」や「患者」という医療系の単語が特徴語として抽出されたものと考えられる。

高校生の作文では、「高校」「学ぶ」「入学」などの学校に関する語が特徴的であった。高校は学校選びの末、受験を経て入学するという小中学校とは異なる過程を経て在学するものであることや、学科制となり、職業を意識したカリキュラムで学ぶ生徒が増えることを反映した結果と考えられる。

コーディング・ルールに基づく χ^2 分析

頻出語と木崎・山口（2003）を参考に、「職業に関する語」「気持ちに関する語」「家族に関する語」「生活に関する語」「学校に関する語」の5つのコーディング・ルールを設け、コーディングを行った（Table 4）。分析対象の単位は文とした。各カテゴリーの度数と割合をTable 5に示した。また、学校段階と

Table 4 本研究で用いたコーディング・ルール（*はコード名）

*職業に関する語 仕事 or 働く or 職業 or 職場 or 就く
*気持ちに関する語 感じる or 心 or 気持ち or 楽しい or 好き or 嬉しい or 一生懸命 or 憧れる or 不安
*家族に関する語 父 or お父さん or 祖母 or 母
*生活に関する語 生活 or 生きる
*学校に関する語 勉強 or 高校 or 小学校 or 学習 or 実習 or 授業 or 入学 or 学ぶ

Table 5 各カテゴリーの度数と割合（分析対象の単位は文）

カテゴリー名	度数	割合
*職業に関する語	237	14.93%
*気持ちに関する語	203	12.79%
*家族に関する語	75	4.73%
*生活に関する語	69	4.35%
*学校に関する語	89	5.61%
#コード無し	1,027	64.71%
文書数	1,587	

カテゴリーのクロス集計表を Table 6 に示した。

χ^2 分析の結果、5 カテゴリー中4 カテゴリーで有意な結果が得られた。バブルプロットを Figure 2 に示した。以下、 χ^2 分析で有意な結果が得られた4 カテゴリーについて、残差分析の結果を見ていくと、「気持ちに関する語」は、小学校で少なく、中学校で多かった。「家族に関する語」は、小学校で多く、中

Table 6 学校段階ごとのコードの出現数と出現率のクロス集計表

	*職業に関する語	*気持ちに関する語	*家族に関する語	*生活に関する語	*学校に関する語	ケース数
小学校	69 (16.79%)	37 (9.00%)	53 (12.90%)	13 (3.16%)	16 (3.89%)	411
中学校	87 (12.52%)	106 (15.25%)	3 (0.43%)	23 (3.31%)	24 (3.45%)	695
高等学校	81 (16.84%)	60 (12.47%)	19 (3.95%)	33 (6.86%)	49 (10.19%)	481
合計	237 (14.93%)	203 (12.79%)	75 (4.73%)	69 (4.35%)	89 (5.61%)	1,587
χ^2 値	5.681	9.104*	90.029**	10.493**	27.432**	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ 。

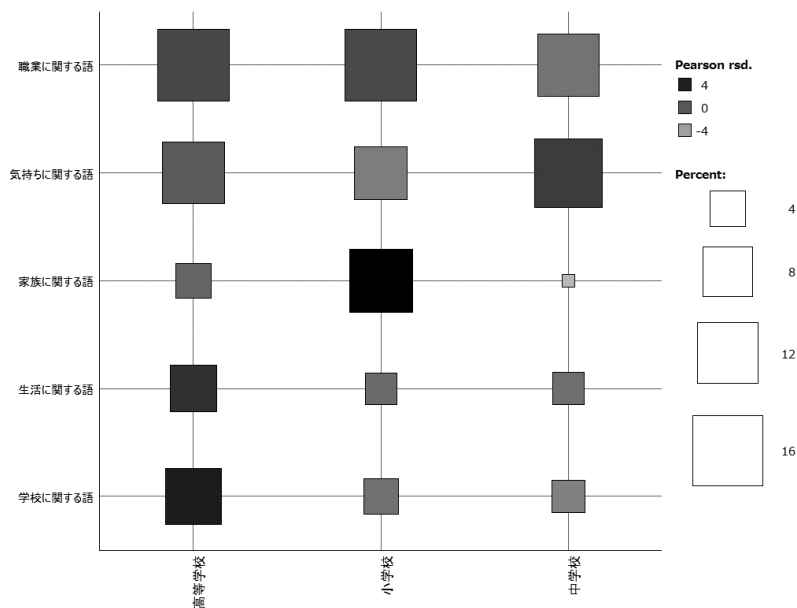


Figure 2 学校段階ごとのコード出現率のバブルプロット

学校で少なかった。「生活に関する語」と「学校に関する語」は高校で多かった。

「お金」を含む文章の分類

仕事観についての作文コンクールであったが、賃金等についての語は頻出語上位150語の中には見当たらなかった。そこで、コンコーダンス機能を使用して、「お金」という語を使った文章を検出したところ、8つの文章が該当した。1つの作文で2回使用される例が3件あったため、5作品が「お金」という語を使用していたことになる。

文章単位で内容を抽出し、筆者が分類した結果をTable 7に示した。「働くのはお金のためだけではない」という内容が5件（3作品）、「お金がないと生活できない」という内容が1件（1作品）、「アルバイトでお金のありがたみを知った」という内容が1件（1作品）、「文章表現として、“お金を払ってまで～する”という言い回しを使用した」例が1件（1作品）であった。該当文章が少ない中でも、「働くのはお金のためだけではない」という内容が小中学生の作文に多く見られたことが特徴的であった。

Table 7 「お金」という語の使用回数と分類（数字は文章数、カッコ内の数字は作品数）

	①お金だけではない	②生活できない	③ありがたみ	④文章表現
小学校	3(2)	1(1)	0(0)	0(0)
中学校	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)
高校	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)
合計	5(3)	1(1)	1(1)	1(1)

注) カテゴリー名は表中で省略した。正式なカテゴリー名は次の通りである。「①働くのはお金のためだけではない」、「②お金がないと生活できない」、「③アルバイトでお金のありがたみを知った」、「④文章表現として、“お金を払ってまで～する”という言い回しを使用した」。

考察

本研究では、児童生徒の勤労観、職業観の様相を明らかにすることを目的として、「みやぎ仕事作文コンクール」の受賞作文を計量テキスト分析によって分析した。以下、特徴語分析とコーディング・ルール適用後の各学校段階の比較の結果から、各学校段階の特徴について述べる。また、「お金」を含む文章の分類に基づいて、賃金が発生しないという不十分な職業の体験が児童生徒にどのように受け止められているのかについて考察する。

各学校段階の特徴

まず、小学生の特徴を述べる。小学生では、特徴語として「父」が抽出されたことおよびコーディング・ルールの「家族に関する語」が中学生と比較して多く見られたことが特徴であった。これらのことから、家族、特に父親を通して勤労観や職業観を形成する傾向にあることが伺える。類似の傾向は、高橋・阿比留・深作（2010）でも見出されており、家族を通して勤労観や職業観を形成する姿勢は小学校段階の特徴であると結論づけられる。

中学生では、特徴語として「職場体験」が抽出され、コーディング・ルールの「気持ちに関する語」が小学生と比較して多く、「家族に関する語」が小学生と比較して少ないことが特徴であった。これらのことから、中学生は職場体験を通じて、自分なりに様々なことを感じることによって、勤労観や職業観を形成する傾向があることが伺える。また、職場体験で自分なりの気持ちを得るためか、家族を通して勤労観や職業観を形成する傾向は減少する。つまり、職場体験により、自分なりに職業について考えるようになる段階といえる。

高校生は「高校」「学ぶ」などの学校に関する語が特徴語であった。また、コーディング・ルール適用後には「生活に関する語」と「学校に関する語」が多いことが特徴であった。これらのことから、高校段階では、高校生活の中の体験から勤労観や職業観を形成する傾向があると考えられる。これは高校では学科制になり、職業につながる学びをする生徒が増えるためであるかもしれない。また、高校卒業後、大学や専門学校に進学せずに就職する生徒もいるため、高校生活を振り返る内容が増えることも高校生活に目が向く要因となっている可能性がある。諸富（2007）はキャリア教育のモデルを提示しているが、高校でのキャリア教育においては内省を活かすことを提案している。本研究では高校生の特徴語として学校生活に関する語が見出され、実際に高校生が内省を行っている様子が示された。これは、キャリア教育の方法論との整合性の高い結果であると考えられる。

以上、小学校、中学校、高校の特徴を整理した。全体として、小学校の段階では親を通して勤労観や職業観を形成するが、中学校では職場体験を通して自分なりの勤労観や職業観を形成する視点を得、高校では高校生活の中の体験から勤労観や職業観を形成するようになるといえるだろう。学校段階が進むにつ

れて自分なりの視点の比重が高まるのが本研究から見いだされた。

キャリア発達について小学校から高校までを対象として比較した研究は、筆者の知る限りこれまでほとんど行われてこなかった。発達段階として、小学校は児童期、中学校と高校は青年期にあたることや、小中学校は義務教育であるが高校は義務教育ではないことなど、小学校から高校までを同時に対象としない合理的な理由も想定可能である。しかしながら、文部科学省（2006）等、小学校から高校までを対象としたキャリア教育の指針があることを考慮すると、本研究のように3つの学校段階を同時に対象としたことには一定の意義があると考えられる。

「お金」の語を使用した文章の分類

「お金」の語を使用した文章の分類では、「働くのはお金のためだけではない」という内容の文章が小中学生の作文に見られた。小学生や中学生は賃労働ができないため、限られた観点から職業について考えざるを得ず、「お金のためだけではない」という考えに至るものと考えられる。大学生を対象とした渡辺（2014）において、アルバイトの状態によってお金に対する考え方に差が見られたことを考え合わせると、中学校での職場体験から、高校生や大学生になってからのアルバイトという、無給から有給への体験の転換が円滑に行われるような配慮も必要かもしれない。「お金のためだけではない」という内容には、お金も大事であることを意識しながら、人のためになることをしたいという気持ち表現されているが、「お金」と「人のため」のどちらを重視するのか、あるいはその両者についてどのように自分なりのバランスを見出すのかについては、大学生や若年労働者、つまり青年期後期以降の課題となるのであろう。

本研究の限界

本研究の限界について4点述べる。第一に、本研究では、作文コンクールの受賞作文を分析対象とした。そのため、結果の一般化には注意が必要である。特に、受賞作文は審査を経ており、大人の考える「望ましい仕事観」を多く含む内容の作文が受賞している可能性が高い。そのため、今回の結果は「大人の考える望ましい仕事観についての児童生徒の作文」を分析したものであることに留意が必要である。また、1つの県で行われたコンクールであることから、当該の県のキャリア教育の方針などに強く影響された結果である可能性も考慮

しなければならない。今後、他の地域から同様のテキストを得、本研究と同様の結果となるか検討する必要がある。

第二に、コンクールの募集テーマに例が記載されていたことから、例に影響された語が頻出語として多く見られた。児童生徒に自由に仕事について作文させた場合、本研究で対象とした作文と同様の内容になるとは考えにくい。本研究の結果は、特定のテーマの下に作成された作文を対象としたことに留意が必要である。

第三に、特別支援学校の生徒の作品数が1点しかなかったため、当該作文を一部の分析に使用しなかった。しかしながら、特別支援学校におけるキャリア教育や就労支援も重要なテーマである。そのため、何らかの方法で、特別支援学校に在籍する児童生徒の職業観や勤労観を明らかにする試みも今後必要であるだろう。

第四に、「お金」の語を含む文章については、対象となる文章が少なかった上、筆者のみによる分類から考察を行った。対象とする文章を増やし、複数の研究者による分類を行うことで客観性を高めることも今後の課題である。

引用文献

- 中央教育審議会(1999). 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309737.htm (2019年10月11日閲覧)
- 樋口耕一(2014). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して—— ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一(2017). 計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望 社会学評論, 68, 334-350.
- 院田晴香・舟生日出男(2018). 振り返りワークシートのテキスト分析に基づく学校インターンシップを通じた教職志望学生の意識変容の把握 日本科学教育学会研究会研究報告, 33, 97-102.
- 木崎彰・山口好和(2003). 「職場体験学習」における体験記述の分析——作文主題の整理をもとに—— 学校教育学会誌, 8, 43-54.
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導センター(2013). キャリア教育・進路

- 指導に関する総合的実態調査第二次報告書 http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/pdf_2/rpt-all.pdf (2019年10月14日閲覧)
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導センター(2019). 平成29年度職場体験・インターンシップ実施状況等結果(概要) <http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-ship/h29i-ship.pdf> (2019年10月14日閲覧)
- 松本幸一(2015). テキストマイニングによる記述答案の分析——「キャリアデザイン」授業を通して得られた資料—— 教養研究, 22, 81-104.
- 宮城県経済商工観光部雇用対策課(2014). みやぎ仕事作文コンクール <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/245982.pdf> (2019年10月14日閲覧)
- 宮城県経済商工観光部雇用対策課(2015). みやぎ仕事作文コンクール <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/294065.pdf> (2019年10月14日閲覧)
- 水島智史(2018). テキストマイニングによる園芸を学習している高等学校生徒を対象とした園芸生産現場におけるインターンシップの教育効果の分析 園芸学研究, 17, 231-236.
- 文部科学省(2006). 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き——児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために—— http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/070815/all.pdf (2019年10月11日閲覧)
- 諸富祥彦(2007). 「7つの力」を育てるキャリア教育 図書文化.
- 高橋平徳・阿比留久美・深作拓郎(2010). 子どもの「仕事」観の形成に関する一考察——作文コンクール「しんじゅく・わたしの街 働く人・地域の仕事・家族」に見られる「仕事」イメージ—— 弘前大学生涯学習教育センター年報, 13, 15-29.
- 渡辺伸子(2014). 大学生用お金に対する信念尺度の作成 応用心理学研究, 40, 11-22.